



The Japan Association for Language Education and Technology

外国語教育メディア学会

Newsletter No. 98

January 2018

発行 外国語教育メディア学会 (LET) (会長: 柳 善和)
事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院人文学研究科 尾関修治研究室内
TEL: 052-789-4188 (直通) HP: <http://www.j-let.org/>

巻頭言

ご挨拶

会長 柳 善和 (名古屋学院大学)

会員の皆様にはLETの運営に日頃からご協力をいただいております。

さて2017年度第57回全国研究大会は、8月5日(土)・6日(日)・7日(月)の3日間、中部支部の担当で名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎で開催されました。開催にあたっていろいろなご準備をいただきました中部支部の先生方に心より感謝申し上げます。中部支部担当で全国研究大会を運営しました2007年度、2011年度、2017年度と、私の勤務校でもあります名古屋学院大学をご利用いただきました。会場の利便性、校舎内の教室配置など全国研究大会を開催するのに便利な会場であり、私としても大変嬉しく思っております。しかしながら、残念なことに、今年の大会では台風の接近で7日(月)午前8時頃名古屋市に暴風雨警報が発令されて、午前中のバトラー後藤裕子先生のご講演をもってその後のプログラムをキャンセルせざるを得ませんでした。ご発表を予定していた先生方、またパネルディスカッションをお願いしていた先生方に多大なご迷惑をおかけすることになりました。天災ということでもありますが深くお詫びいたします。

今年の大会では、基調講演として松本茂先生(立教大学)に「英語教育新時代」に向けて」と題して、さらにバトラー後藤裕子先生(University of Pennsylvania)に「外国語学習を促進するゲーム要素—子どもの視点からの考察」と題してご登壇いただきました。どちらも大変多くの先生方にご来場いただきましたが、特に松本茂先生の基調講演は一般の方々にも開放して、日曜日の午前10時からの開催にもかかわらずほぼ満員の出席者がありました。ご講演をいただいたお二人に感謝申し上げます。

また台風のためにキャンセルとなりましたが、パネルディスカッションとして石井雄隆

目次

巻頭言	1
第57回全国研究大会実行委員会より	2
2017年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿.....	6
第57回(2017年度)全国研究大会報告	9
2016年度本部事業報告・決算報告	28
2017年度本部事業計画・予算	30

先生(早稲田大学)にコーディネーターをお願いして、「ICTを活用したこれからの評価を考える」と題し、根岸雅史先生(東京外国語大学)、木村哲夫先生(新潟青陵大学)、永田亮先生(甲南大学)、近藤悠介先生(早稲田大学)にご登壇の予定でした。出来ればいずれかの機会にご発表いただければと考えています。

機関誌の発行については、昨年度に引き続き予定通りに第54号を2017年6月に発行することが出来ました。今後とも順調に発行し続けることで、会員の先生方の信頼を深め、研究成果の公開に役立てていただきたいと思います。今後ともぜひ先生方の研究成果をLET機関誌にご投稿下さい。

なお、2018年度の第58回全国研究大会は、8月7日(火)・8日(水)・9日(木)に関西支部の担当で、千里ライフサイエンスセンター(大阪府豊中市)で開催されます。2015年度に全国研究大会を開催した会場です。多くの先生方の参加を得て盛大な全国研究大会になるように期待しています。

最後になりますが、今年の全国研究大会と同時に開催された理事会で、2019年8月初旬に関東支部が担当してFLEAT 7を開催することを決定しました。こちらでも、新しい研究成果が多く発表されるように期待しています。

毎年同じように学会活動が続いているようではありますが、その中でも新しい学会員が加わり、また研究の動向も年々変化していきます。伝統の継続と新しい研究領域の変化・発展のバランスを取りながらLETをさらに盛り上げていきたいと思えます。

LETに今後ともさらなるご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

第57回全国研究大会実行委員会より

全国研究大会を終えて

大会実行委員長 高橋 美由紀（愛知教育大学）

第57回全国研究大会は、2017年8月5日～7日の日程で名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎にて開催されました。5日のワークショップ290名、6日・7日の延べ参加者約600名と、台風の影響で7日午後のプログラムをキャンセルしたにも関わらず、皆様方のお陰で成功裡に終了できたこと本当に感謝しております。

本会場での全国研究大会は、過去2回の中部支部担当（柳善和・尾関修治実行委員長）に続き今回が3度目となりました。参加された先生方はもとより展示業者の方々にとりましても「馴染みのある会場」であったと思います。

今年度のテーマは「外国語教育の未来：アクティブラーニングの資するもの」でした。これは新学習指導要領を踏まえて題したのですが、もとよりLET学会の諸先輩方の研究が礎となったテーマであったことを改めて認識しました。過去から未来へ、脈々と続く「LETの魂」を引き継いで次にバトンを渡すべく、様々な人々との「縁」を深く感じた研究会でした。

LETの歴史を紐解くと、45年前に私の恩師（岐阜大学教育学部附属中学校 内野孝夫氏）が、前身のLLA学会で、東海地区で初めて導入されたLL教室での「主体的・対話的」な授業によって、生徒の深い学びが育成されていることを発表されたことをはじめとして、学習者の自学自習やグループワークによる学習等、「アクティブラーニング」の研究の黎明期を知りました。今回の発表でも、ICTを活用した授業実践研究、及び、研究者と実践者、賛助会員様との協同研究等、小・中・高・大の各々の学校現場で求められる取り組みについて知見を広げ、議論を深めることができたと思いました。

5日のワークショップでは、明日の授業に即活かせる実践や研究手法を体験的に学ぶことができました。講演では、松本茂先生（6日）からは「英語教育新時代に向けて」という題で、これまでの日本の英語教育の課題から、2030年を見据えた今後の英語教育のあり方までをお話頂きました。なお、この講演は市民講座として一般の方々にも公開しました。朝10時からと早い時間からのプログラムでしたが、名古屋市や愛知県はもとより、近隣の岐阜県・三重県・静岡県などからもたくさんの方々にご参加いただきました。早朝に家を出てきた方々も多くいらっしゃったとうかがっています。バトラー後藤裕子先生（7日）からは「外国語学習を促進するゲーム要素—子どもの視点からの考察」という題で、子ども達が実際に外国語学習で活用するゲームを創る事

例研究から、ICTを活用したアクティブラーニングについてお話頂きました。この時間は台風の影響が出始めていたのですが、会場一杯の参加者となりました。

また、6日の懇親会では136名の方が集い、研究について語り合い、親交を深めることができました。元LET会長の大八木廣人先生と木下正義先生にもご出席いただき、オープニングでは当時を懐かしみ「サンタルチア」のお歌のワンフレーズをお願いしました。

残念なことに、台風の影響により、最終日の午後からのセッションを中止せざるを得なくなりました。研究発表、及び、シンポジウムでご発表予定であった先生方、また、これらの発表を楽しむにしていた人々には大変申し訳ありませんでした。

また、本大会は、「チームワークの良さで、素晴らしい大会だったですね」と参加された先生からお言葉を頂きましたが、女性パワー、及び、若手のパワーはもとより中部支部では、支部役員と全国役員の先生方が一丸となって本大会の実行委員としてご尽力頂きました。とりわけ、事務局長の西尾由里先生、会場校担当者の工藤泰三先生、副支部長の伊藤佳貴先生、犬塚章夫先生、柴田里実先生をはじめと多くの支部役員の先生方、また、準備から撤去まで蒸し暑い場所での仕事を笑顔でしてくれたアルバイトの名古屋学院大学の学生さん達には本当にお世話になり感謝しております。

最後になりましたが、中部支部を支えて下さっている支部会員の先生方のお陰で、本大会の実行委員長役目を無事に果たすことができ、次の関西支部へとバトンを渡すことができます。本当にありがとうございました。

全国研究大会を終えて

大会事務局長 西尾 由里 (名城大学)

このたび、LET57回全国研究大会が、8月5日～7日の日程で、名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎において開催されました。5日(土)・6日(日)は、名古屋らしい大変暑い夏の日となりましたが、一転7日には台風5号の接近に伴い、暴風警報が発令され、やむなく7日午後の研究発表、及びパネルディスカッションは中止とせざるを得ず、この発表のご準備をされていた先生方や発表を楽しみにされていた皆様を落胆させてしまうことになり、誠に残念な気持ちでいっぱいです。

しかしながら、台風という不測の事態がありましたが、例年に匹敵するほど多くの皆様にご来場いただきました。ワークショップは290名のご参加があり、6日・7日(午前まで)の参加も約600名となっております。多くの皆様のご参加ありがとうございました。

本大会では、松本茂先生の基調講演を始め、なお、台風のなか多くの方の参加を頂きましたバトラ後藤裕子先生の基調講演、また研究発表・実践報告、シンポジウムなど、席を埋め尽くすほど多くの皆様のご参加いただきましたこと感謝致します。ワークショップ及びポスター発表も非常に充実した素晴らしい内容でした。また、32社の賛助会員様からの展示もあり、最新の教育情報を得ることができるよい機会となりました。

また、本研究大会実施にあたり、素晴らしい研究発表会場をご提供してくださいました名古屋学院大学小林甲一学長、柳善和LET会長、会場担当としてご尽力を頂きました工藤泰三先生、本場にありがとうございました。さらに、本大会運営に協力して下さった実行委員の皆様のおかげで、恙なく全国大会が実行できましたことと感謝致します。

英語教育を囲む環境は、2020年度大学入試改革、小学校英語の教科科および低年齢化など、目まぐるしく変わってきております。また、国立教育政策研究所の21世紀型能力の提言（2013年）によると、求められる能力としては「生きる力」であり、「基礎力」「思考力」「実践力」がそれを支える力であるとしています。特に「基礎力」には、言語や情報を収集分析するICTの能力が挙げられ、そこから、問題解決をする思考力、コミュニケーションを図っていく実践力をつけていきます。今後、21世紀型能力の養成において、外国語、ICT、教育と枢軸となる能力の向上の研究を目指している本外国語教育メディア学会の果たす役割がますます重要になってきます。松本茂先生のご講演の中、「今ほど英語教育を推進していくチャンスはないかもしれない、これが最後かもしれない」という言葉には、身が引きしまる思いがしました。

次の開催は関西となりますが、来年度も皆様とICT及び英語教育について議論を深められる会になりますことを楽しみにしております。

2017年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿

渡された楽会のバトン

学術賞 水本 篤（関西大学）

このたび、「量的アプローチとそれを基盤にした実証研究に依拠するData-driven型外国語教育の展開」という業績に対して、外国語教育メディア学会（LET）の学術賞をいただけたことを非常に光栄に思っております。ご推薦いただいた先生方、学会賞選考委員の先生方、会長の柳善和先生、本部事務局長の尾関修治先生、本当にどうもありがとうございました。

LETは、竹内理先生が会長を務められていたときに何度も言及されていた、「学会は楽会（界）となるべし」という提言を具現化している学会であると思います。メディア利用に限らず、外国語教育における多種多様で有益な内容を、楽しく、そして厳しく（ときにはマニアックに）研究し、実践の対象としている人たちが集まっている学会です。

また、50年以上の歴史があり権威がある学会であるにもかかわらず、関西支部の「メソドロジー研究部会」や、中部支部の「外国語教育基礎研究部会」など、自由な雰囲気楽会（界）であるLETでなければ作ることができなかつたであろう研究部会もあり、支部レベルだけではなく、そのような研究部会からも多くの独創的・刺激的な研究を行う研究者が育っています。LETでは今後もそのような良き伝統が続いていくことだろうと思います。

今回、このように素晴らしい学会から学術賞を頂けたとことにより、これまで自分が進んできた道が間違いではなかったという自信となり、今後の大きな励みとなりました。

自分の中でLET学会学術賞は、「長い研究者人生で、いつか受賞できればラッキーであるもの」という位置づけでした。今回の受賞により、この学術賞は、LETを創り上げてこられた上の世代の先生方から渡されたバトンのようなものなのであろうという思いに変わりました。これまでLET学会学術賞を受賞された先生方にはまだまだ及ばない未熟者ですが、今回の受賞の喜びを忘れずに、この渡されたバトンを次世代に引き継ぐことができるように、LETをさらに楽しい会として盛り上げていけるよう、今後も研究に邁進していきたいと思っています。引き続き、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

シンクロシティとセレンディピティ

新人奨励賞 金澤 佑（関西学院大学・追手門学院大学）

此度は、2017年度外国語教育メディア学会の学会賞（新人奨励賞）を賜るという荣誉にあずかり、ありがたき幸せに存じます。恐れ多く感激するとともに、初めて学会発表を行わせていただいた学会でもありますだけに、感慨もひとしおです。LET学会長 柳善和先生、事務局長 尾関修治先生、機関誌編集委員会事務局 石川有香先生、Language Education & Technology第53号掲載のMicro-level emotionの投稿論文を最優秀賞論文にご決定頂いた選考委員会の先生方、新人奨励賞にご推薦いただいた先生、新人奨励賞にご決定頂いた先生方、LET関西支部基礎理論研究部会ほか研究会等でお世話になっている諸先生方、その他関係者の皆様に深く感謝いたします。そして何より、関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科での研究のスーパーバイザーでいらっしゃる門田修平先生をはじめ、研究を支えてくださった先生方や先輩方、特に、長谷尚弥先生、中野陽子先生、氏木道人先生、川真理子様、磯辺ゆかり様、上野育子様、三木浩平様、松田紀子様、ご支援ご助言等、誠にありがとうございました。

思えば、「情動」という研究キーワードに辿り着いたのは博士後期課程1年目の秋でした。しっかりとした理論に基づいた教育実践を志して大学院修士課程の門を叩いてから、認知的アプローチや量的研究手法を学び、実証研究を行い、修士論文を書き、博士後期課程に進学しました。意義深く充実した日々を過ごしておりましたが、それと同時に、正直なところ、内心何とも表現しがたい「掴み切れていない感」のようなものを抱いていました。周囲のご理解とご支援のもと、（無謀にも）修士論文のテーマを変更し、文献蒐集の幅を大きく広げ、学際的探究を始めたのが博士後期課程1年目の夏のこと。神経科学や心理学、哲学の諸概念や諸著作とのシンクロナスでセレンディピタスな出会いに恵まれ、ワクワクしながら理論的探究に没頭しました。その過程で、学部時代の専門であったエコロジカルな視点や、趣味的に読み進めていた初期プラグマティズムや有機的哲学の数々の名著の生命の宿った透徹たる洞察、幼いころ漠然と感じていた言葉にならない“想い”が紡ぎ合わされていくのを感じ、感謝と畏怖の念でいっぱいになりながら理論的考察と構築に取り組ませていただきました。このように独自路線の文献蒐集や思索に邁進する私を広い目で見守り、オリジナリティが過ぎて暴走しないよう折々にて適切に手綱を引いてくださった門田先生に、重ねて感謝申し上げます。敷かれたレールを歩くばかりでなく、自由に自ら考え、観念の冒険に挑むことが許可される風土がなければ、現在の不完全ながら生き生きとした知的世界観や開かれた動対応への絶えざる知的感情的志向には至ることができず、言わずもがな此度の名誉ある人生の一イマージュも訪れなかったであろうと思います。

とはいえ、潜在意識的で微視的、流動的な情動のダイナミズムの探究はまだ辛うじて緒に就く兆しを見せたばかりです。学際性の追求（multidisciplinarityからtransdisciplinarityへ）、研究手法の精緻化やSLAにおける近接概念との関係性の構築、教育実践への応用の模索など、マインドフルな注意と熟考を要する課題が多く残されています。LET関西支部公式YouTubeで公開していただいております拙Classroom Tips（Three-E-Imaginizer）の教育実践アイデアも、まだまだ理論的精緻化と発展の余地があります。そればかりでなく、LET関西支部基礎理論研究部会で事務局の一員を務めさせていただいている「第二言語学習者の英語定型表現の処理・習得」に関する大学横断的共同プロジェクトなど、先生方との相互協力のもと新しい地平にも乗り出させていただいております。この度権威と伝統と実績のある外国語教育メディア学会様から学会賞という大いなる励ましを受けたことに感謝しつつ、今後とも、謹んで探究に従事し、研究者としての幅と深みを増すべく精進して参る所存です。繰り返しになりますが、本当にありがとうございました。

第57回（2017年度）全国研究大会報告

外国語教育メディア学会・第57回全国研究大会は2017年8月5日から7日まで、名古屋学院大学（名古屋市）で開催されました。

概要：

開催日	2016年8月5日（土）－7日（月）
会場	名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎
入場者	延べ600名
主催	外国語教育メディア学会（LET）
会長	柳 善和
大会会長	高橋 美由紀
後援	文部科学省・愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会
実施内容	下記の通り

8月5日（土）

各種会議・ワークショップ

8月6日（日）

基調講演：

「英語教育新時代」に向けて

松元 茂（立教大学）

研究発表・実践報告、公募シンポジウム、賛助会員プレゼンテーション、賛助会員展示、学会賞表彰、総会ほか

8月7日（月）

基調講演：

外国語学習を促進するゲーム要素—子どもの視点からの考察

バトラー 後藤 裕子（ペンシルバニア大学）

パネルディスカッション：

ICTを活用したこれからの評価を考える*

コーディネータ：石井 雄隆（早稲田大学）

パネリスト：根岸 雅史（東京外国語大学）、木村 哲夫（新潟青陵大学）、永田 亮（甲南大学）、近藤 悠介（早稲田大学）

*台風に伴う暴風警報発令により中止。

研究発表・実践報告、公募シンポジウム、賛助会員プレゼンテーション、ポスター発表、賛助会員展示、ほか

8月5日（土）：第1日

各種委員会・支部長連絡会・理事会

ワークショップ

12:30-14:00

Extensive Reading Basics: What and How

Thomas E. Bieri (南山大学)

ICTを活用したアクティブ・ラーニング型授業—アプリを用いたワークショップ—

反田 任 (同志社中学校・高等学校)

文部科学省作成の英語絵本2冊の活用法—3・4年生の外国語活動—

清水 万里子 (岐阜女子大学)

学習者コーパス研究入門：日本語学習者・英語学習者のL2産出をどう評価するか

石川 慎一郎 (神戸大学)

外国語教育研究者のためのベイズ統計入門

草薙 邦広 (広島大学)

質的研究の技法以前：研究デザインをどのように設計するか

高木 亜希子 (青山学院大学)

14:20-15:50

英語語彙指導で考えたいこと：語彙を増やして整理する

森田 光宏 (広島大学)

主体的・探究的な学びに結びつけるための協同学習

金丸 紋子 (カリタス女子中学校・高等学校)

生きる力を育む小学校英語の創造—岡崎市立本宿小学校の実践から—

福田 貴子・内田 巧治・奥井 利香・高木 理人・
荒木 美穂 (愛知県岡崎市立本宿小学校)

質問紙調査の基礎知識—準備・分析・活用をふまえて—

今野 勝幸 (静岡理工科大学)

外国語教育研究における統計処理入門

小島 ますみ (岐阜市立女子短期大学)

16:10-17:40

授業に取り入れたい英語プロソディの指導

大和 知史 (神戸大学)

12 activities for active learning with PowerPoint

Paul Wicking (名城大学)

コーパスから有意義な情報を抽出するために必要なこと

滝沢 直宏 (立命館大学)

Rを用いた外国語教育データの整理・要約

川口 勇作 (愛知学院大学)

TED動画を使ったアクティブラーニングへの挑戦—導入、プレゼン発表会、スマホ、多言語対応まで—

田淵 龍二 (ミント音声教育研究所)

8月6日（日）：第2日

総会・学会賞授与式

開会行事

司会：西尾 由里
 会長挨拶：柳 善和
 大会実行委員長挨拶：高橋 美由紀

司会：尾関 修治
 会長挨拶：柳 善和

公募シンポジウム

基調講演

「英語教育新時代」に向けて

松本 茂（立教大学）

本基調講演の内容は、(1)英語教育に関わる国レベルの施策や調査の概観、(2)英語教育が改善されている大学の先進的な例を検討、(2)2020年までの3年間に大学及び大学教職員が実行すべきこと、の3点であった。

(1)では、これまでの政府及び文部科学省が行ってきた施策が紹介され、さらに今後の大学入試改革について説明があった。特に大学入試で民間の外部試験を活用する案件については会場の関心も特に高かった。(2)では、最近の大学英語教育のポイントとして、①クラスの少人数化、②英語での授業、③到達目標の明確化、④Content-Based Instruction/CLIL/Project-Based Learningを重視、⑤留学プログラムや海外インターンシッププログラムの充実、⑥パフォーマンス評価重視、が挙げられた。(3)では、①入学者選抜、②高大接続、産学連携、③指導法、教材開発、④専門教育と英語教育の関係、について説明があった。

本講演は一般の方々にも開放され、日曜日午前10時から早い時間であったにもかかわらず多くの方々に参加していただいた。感謝申し上げたい。

【報告：柳 善和（名古屋学院大学）】

ジャンル準拠アプローチによる英語学術論文執筆支援ツールの開発と拡張—理論と実践—

水本 篤（関西大学）・保田 幸子（神戸大学）・近藤 悠介（早稲田大学）

多くの研究分野においては、英語での成果の発信がますます求められている現状がある。英語母語話者以外の研究者にとっては、そのような英語での執筆において、言語的なハンディキャップがあるため、ESP（English for Specific Purposes）では、ジャンル・アプローチによる研究や指導がこれまで数十年に渡って行われてきた。本シンポジウム発表者たちは、ジャンル・アプローチに依拠した英語学術論文執筆支援ツールの開発と利用を進めており、以下の3点を報告した。

(1) ジャンル準拠アプローチの理論的基盤と実践例（保田 幸子・神戸大学）

英語で文章を書くためには、文法や語彙といった言語知識の他に、目的、読み手、使用領域に応じた表現や構成、文体を選択するというジャンル知識が求められる。しかし、日本のようなEFL環境では、教室指導において前者の言語知識は身に付いたとしても、ジャンル知識が育ちにくく、このことが学習者にとってのライティングの難しさに起因すると言われている。本発表では、新しいライティング教授法としての「ジャンル準拠アプローチ」について、その理論的基盤と実践例について報告した。

(2) 英語学術論文執筆支援ツールの開発と利用（水本 篤・関西大学）

英語学術論文執筆支援ツールAWSuM（Academic Word Suggestion Machine）

は、論文のセクション内で伝えたい内容のかたまりごとに、より特徴的な頻度の高い語連鎖を提示し、論文執筆をサポートする無料オンライン・ツールである。本発表では、このツールの学術的背景、開発経緯、ユーザーの感想、そして効果的な利用方法を報告した。

(3) ツールの拡張とその可能性 (近藤 悠介・早稲田大学)

AWSuM開発をさらに効率良く進めるため、これまで蓄積されたデータを用いて、英語学術論文のアブストラクトにおいて伝えたい内容のかたまりを自動で分けるシステムを開発した。本発表では、このツールの開発過程とツールの利用可能性について報告した。

これら3つの報告の後、フロアからは今後のツール開発の可能性や、指導での利用について、活発な質疑応答が行われた。

【報告：水本篤 (関西大学)】

研究発表・実践報告

Synergetic Effect of Integrating a Smartphone App for Vocabulary Learning with the Traditional Paper-book Learning Method

Kaya Tadayoshi (Gakushuin Women's College)

The presenter presented the results of two empirical studies examining the effectiveness of smartphone apps for vocabulary learning. The first study found that using both word books and smartphones over a 2-week period led to better performances on vocabulary tests, but the second study showed that using a word book alone was more effective over an 8-week period, leading the presenter to conclude that the results of the first

experiment were due to the smartphone “novelty effect” which wore off after the first weeks.

【報告：Douglas Jarrell (名古屋女子大学)】

統制的発表語彙サイズテストの適用可能性の再検証

今井 由美子 (同志社女子大学)・三根 浩 (同志社女子大学)

統制的発表語彙サイズテストVLT-CPAの2つの並行テスト (Version 1とVersion 2) を比較し、日本人EFL学習者への適用可能性を再検証した。124名の大学2年生のCELTの平均点に基づいてLow群とHigh群に分け、VLT-CPAのVersion 1とVersion 2の結果を検証した。Version 2の難易度はVersion 1よりもかなり難しく、特にLow群の学習者にとって困難であることが分かった。質疑応答では、使っていた試験が何年版であるか質問があった。

【報告：Douglas Jarrell (名古屋女子大学)】

Putting “Don’t Just Think, but Also Feel” into Pedagogical Practice: The Effect of Emotion-Involved Processing on L2 Vocabulary Acquisition

Kanazawa Yu (Otemon Gakuin University)

The hypothesis of the study was that new words are better acquired when they are learned in a task employing questions which facilitate Emotion-Involved Processing than when the questions were designed to facilitate imaging-involved semantic processing. The presenter gave examples of how these tasks were implemented and went on to discuss the results. The Wilcoxon Signed-Ranks Test indicated that Emotion-Involved Processing had significant benefits while the matching test showed no significant

difference. The presenter concluded that there were other reasons for this discrepancy and that Emotion-Involved Processing is effective in L2 vocabulary acquisition in a classroom setting.

【報告：Douglas Jarrell (名古屋女子大学)】

HiroTan：新たな自学自習用単語学習システムとその特徴

阪上 辰也 (広島大学) ・榎田 一路 (広島大学) ・森田 光宏 (広島大学) ・鬼田 崇作 (広島大学) ・大西 昭夫 (株式会社 VERSION2)
広島大学が中心となり開発した英単語学習オンラインソフトの紹介であった。英語授業との連携において、毎年1000名の大学1年生がパソコンを媒体として学んでいて、標準レベル4000語の発展レベル2000語の計6000語が収録されている。単語をみて日本語の意味が分かるという理解を定着させる意図がある。同時に発音が学べ、自分の学習進捗度を知ることのできるプログラムである。

【報告：佐藤 明彦 (拓殖大学)】

日本人英語学習者のコロケーション学習への示唆－語法的研究に沿った分類の視点から－

デイヴィス 恵美 (関西学院大学)

Continuum Model (Howarth, 1998)に基づき、コロケーションにおいて意味推測しやすいものから難しい順にカテゴリー分けをし、学習者の理解度などを考察した。結果としては、このカテゴリー分けが日本人英語学習者においても妥当であるとのことであった。コロケーションに焦点を当てた指導方法が語彙習得に活用できることが提案された。

【報告：佐藤 明彦 (拓殖大学)】

英語学習辞書への意識変化：スマホとタブレットを比較して

小山 敏子 (大阪大谷大学)

日本人学習者の英語学習時に使用する辞書に関する研究調査であった。大学生に語義を問う設問、読解問題を、それぞれスマートフォン辞書とタブレット辞書を使わせ解答させ、その後アンケート調査がおこなわれた。スマートフォン辞書の方が再認率の点で優れていた。また、限られた情報の方が読みやすいというインタビュー結果から、学生に見せる情報を限定する利点などが示唆された。

【報告：佐藤 明彦 (拓殖大学)】

授業研究を促進するリアルタイム授業分析システムの開発

石塚 博規 (北海道教育大学旭川校)

授業研究を促進するために開発されたアプリの紹介とその実践についての報告であった。このアプリを使えば、撮影された授業内容がリアルタイムに分析され、授業者に対して適切な分析結果を即座に示すことが可能となる。発表では、実践されている学校での事例を挙げながら、その有用性や今後の展望について報告された。

【報告：伊藤 佳貴 (大同大学大同高等学校)】

英語による反転教科授業の実践報告

金子 恵美子 (会津大学)

英語で授業を受けるために必要な語学力を補うために、反転授業を取り入れた実践の報告であった。自作のビデオを活用し、授業運営の方法にも様々な工夫が施されていた。授業アンケートからも反転授業の導入を評価する結果が得られた。参加者からは、具体的な授業方法に関する内容や評価方法に関する質問があった。

【報告：伊藤 佳貴 (大同大学大同高等学校)】

自律学習を促す理系英語オンライン学習教材の開発

安浪 誠祐 (熊本大学)

自律学習を促すオンライン学習教材の開発とその実践に関する報告であった。学習ノルマを設けて十分な学習量を確保しながら、学生の興味を引くテーマを厳選して教材化することにより、自律的な学習習慣が促進されているように思われる。発表では、対象学生の成績推移のデータに基づいて、その成果などが報告された。

【報告：伊藤 佳貴 (大同大学大同高等学校)】

賛助会員プレゼンテーション

グローバル人材育成のためのブレンド型英語学習教材

プライド・マット株式会社桐島書店・株式会社SMATOOS (株式会社桐島書店・株式会社SMATOOS)・長廻 祈子 (株式会社SMATOOS)

本発表では、ビジネスで使用する英語表現に焦点を当てた教材「Global Vison」とその使用方法が提案された。本教材の最大の魅力は、NYやシリコンバレー等での実際のビジネス場面の膨大な映像資料 (株式会社SMATOOSのBeNative) を使っている点である。英語表現だけでなく、現在の英語圏での就職活動方法等、ビジネス知識も扱っており、非常に興味深い。

【報告：柴田 里実 (常葉大学)】

新形式対応TOEIC教材と入学前教育での活用

平 治彦 (日本データパシフィック株式会社)・皆川 祐美子 (日本データパシフィック株式会社)

本発表では、TOEICのe-learning教材と活用事例が提案された。大学教育では入学生が多様化し、入学前教育の充実が求められている。マイステップゼミとU-Assistの2種類の教材が紹介され、500円と安価なも

のがあることに驚かされた。大学入学前の「不安感が払拭できた」、「学ぶことの楽しさに気付いた」等の利用者のコメントが大変興味深かった。

【報告：柴田 里実 (常葉大学)】

スピーキングに特化したトレーニングアプリケーションとその活用事例の紹介

沼田 剛史 (G-TELP日本事務局)

本発表では、スピーキングトレーニングアプリ「MyET」とその使用方法が提案された。スマートフォンを含むあらゆるデバイスに対応している点は、学習者も利用しやすいと考えられる。また開発に際し、動機づけを高めるという視点を取り入れており、その結果、すでにアジア各国で200万人以上が利用している点が大変興味深かった。

【報告：柴田 里実 (常葉大学)】

研究発表・実践報告

時間用法を表す前置詞at, in, onの効果的学習法

中川 右也 (鈴鹿高等学校)

時を示す前置詞at, in, onの指導法において理論言語学の1つである認知言語学の知見を援用した指導法の有効性とその効果を高めることについての発表であった。従来の暗記型の学習方法と、イメージ・スキーマに基づいた前置詞のイメージを使った学習方法を比較することで生徒への定着率の高さについて考察された。

【報告：寶壺 貴之 (岐阜聖徳学園大学)】

大学生の授業内学習エンゲージメントをどう高めるか: フロー理論を用いて

近藤 睦美 (京都外国語大学)・山本 玲子 (京都外国語大学)・石川 保茂 (京都外国語大学)
英語学習へのエンゲージメントを、ポジテ

ィブ心理学の分野で発展し、教育分野での応用も進むフロー理論を用いて捉えることについての発表であった。フローの前提条件である、①挑戦と能力のバランス、②明確な目標とフィードバックが満たされるように設計されたCBL活動を実施することで、受講生のフローが高められることを検証された。

【報告：寶壺 貴之（岐阜聖徳学園大学）】

没入型バーチャル・リアリティによる英語パブリックスピーキング練習用システムの開発: マルチモーダルコーパス分析に基づく教材の展開

冬野 美晴（九州大学）

発表者の研究チームの分析により、パフォーマンス評価の高い学習者の音声ポーズ分布・話速度・アイコンタクト動作パターン等の特徴が明らかになっている。この先行研究データを基に、学習者が360度の没入空間の中で、バーチャル・オーディエンスを前に英語パブリックスピーキングを練習できるように開発されたシステムについて考察された。

【報告：寶壺 貴之（岐阜聖徳学園大学）】

基礎英語の授業におけるタスク性の高いコミュニケーション活動の導入: 学習者の情意的側面の分析からの示唆

江口 朗子（愛知工科大学）・田村 祐（名古屋大学）

著者らの勤務校における基礎英語科目にて、タスク性の高いコミュニケーション活動を導入した結果、学習者がもつスピーキングへの抵抗感が軽減されなかったことを報告した。会場からは、スピーキングに関する質問紙項目の適切性などについて質疑応答がなされた。

【報告：草薙 邦広（広島大学）】

未来英語教師へのiPadを使ったマルチメディア教材開発能力向上ためのプロジェクト

野澤 和典（立命館大学）

発表者の勤務校における教育指導実践、中でもiPadを使用した動画作成ソフトウェアを使用し、外国語および異文化理解教材を作成、共有する活動についての詳細な報告がなされた。特に、現代社会および近未来におけるマルチメディアの利活用と、それを活用する人材、といった観点から展望が示された。

【報告：草薙 邦広（広島大学）】

Breaking Down Barriers in the English Classroom through SNS

Wicking, Paul（名城大学）

著者の勤務校における指導実践について報告がなされた。具体的には、北米における日本語学習者、国内の勤務校における英語学習者の非共時的コミュニケーションとして、ウェブサービス上で当事者が作成した動画をやりとりする活動について詳細に述べられた。

【報告：草薙 邦広（広島大学）】

公募シンポジウム

日本人英語学習者における動機付けと情意：縦断的变化に関する実証研究

西田 理恵子（大阪大学）・阿川 敏恵（清泉女子大学）・小島 直子（同志社大学）・廣森 友人（明治大学）

本シンポジウム企画では、3つの実証研究を動機付けと情意の要因から教育的介入を通して検証した。これは、文部科学省が2020年度に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画に基づいた新たな英語教育の在り方」の検討があり、今後、国内における英語教育においてはグローバル化に対応した英語教育の抜本的充実が計画され

ているためである。従って本シンポジウムでは発表目的を、「日本人英語学習者における英語学習時の効果的な教育的介入の結果、どのように学習者の動機づけや情意が変化をするのかを縦断的調査方法を用いて探る」とし、英語教育における教育的介入を行った場合における動機づけと情意の変化について、日本人大学英語学習者を対象として行っている。

研究1では『日本の大学EFL環境への自己決定理論の応用－自己決定度合いの高い動機づけを高める教育介入－』として自己決定理論に依拠した教育的効果を測定した結果を発表し、研究2では『内発的動機付けの変化と可能自己の可視化－TEDプレゼンテーションを用いて』としてプレゼンテーションの効果を動機づけの視点から発表した。研究3では『自己決定理論の枠組みから理解する英語開講講座における課題とその解決策の提案』として英語開講講座(EMI)の課題と解決を動機づけの枠組みから発表し、3つの研究に対する指定討論を行った。指定討論では「動機づけの変化・発達プロセスとコンテキスト」とし、これまでの第二言語学習における動機づけ研究を基盤とする理論、対象とする動機づけ、時間軸から整理し、先述された3つの縦断研究の位置付けについて確認し、その上で、各研究が何らかの教育的介入によって動機づけが変化・発達する「プロセス」を明らかにしていることを指摘された。会場からは、英語教育場面における教育的介入における言語的側面に関する研究との関わりや研究方法に関する研究のあり方についてなど、活発な議論が展開された。

【報告：西田 理恵子（大阪大学）】

研究発表・実践報告

英語教員志望者の認識の変化:小学校外国語活動でのケース・スタディより

池田 真生子（関西大学）・今井 裕之（関西大学）
竹内 理（関西大学）

教員志望の学生たちが現職教員と交流を持つことによって、教育、指導に関する認識にどのような変化が起こったのかを、学生による研修振り返りシートや学生への事後アンケートの質的分析から探った。その結果、訪問を重ねるごとに学生の教育や指導に対する認識が肯定的に変化し、心理的不安も減少していくことが明らかとなった。フロアからは、学生に対してまた訪問学校との仲介役として指導教員が行った指導や助言についての質問等があった。

【報告：松井 かおり（朝日大学）】

小学校5・6年生向けデジタル英語教材の学習効果—記憶に焦点を当てて—

長谷川 修治（植草学園大学）

小学校5・6年生向けに開発したデジタル英語教材の効果を、授業場面への導入とその後実施した学習内容の定着を測るテストによって検証した。結果は、学習した英語フレーズが、10分後、8日後、13日後のいずれの場合にも児童の記憶に残存することが明らかとなった。フロアからは、本教材が高い記憶効果をもたらした理由や、教材導入後の児童の学習態度の変化の有無などについて質問があった。

【報告：松井 かおり（朝日大学）】

The Importance of Teacher Motivation Research in SLA

Suemori Saki（お茶の水女子大学）

第2言語習得論の動機づけ研究において、最も盛んに行われているのは学習者の動機づけであるが、本研究は教師側の動機づけ

に焦点をあてることによって、教師と生徒の動機づけの相互作用や相乗作用について解明することを目的とした。先行研究の整理と批判的考察を行うなかで、日本の第2言語習得における教師の動機づけ研究が乏しくさらに様々な角度から研究が行われる必要があることが確認された。フロアからは、発表者が考える教師と学習者の動機づけの相互関係等について質問があった

【報告：松井 かおり（朝日大学）】

自己効力感が英文読解の効率性に与える効果について—眼球運動データをもとに—

梁 志鋭（名古屋学院大学）・三上 仁志（中部大学）・吉川りさ（広島大学）

英語学習者の自己効力感と英文読解時における眼球運動の関係性についての研究発表であった。自己効力感が高い学習者ほど、英語母語話者に類似した効率の良い読み方をすることが明らかになったことから、読解指導時における情意的側面への配慮の重要性が示された。

【報告：中西 のりこ（神戸学院大学）】

グループ学習における文書の類似度調査: 足場かけはどのように行われているか

橋本 健広（関東学院大学）

英語学習者がグループに分かれエッセイの協同ライティングを行う際の「足かけ」の効果を探るため、グループ内の文書がどのように類似するかを調べた研究発表であった。文書を質的・量的に分析した結果、英語の表現や語句のレベルではなく、話の進め方や意味レベルにおいてグループ学習の成果が得られることが示唆された。

【報告：中西 のりこ（神戸学院大学）】

オンライン学習プログラムにおける単位取得困難学生の事前検知:非線形最小二乗法による学習到達度曲線のモデリング

草薙 邦広（広島大学）・榎田 一路（広島大学）・鬼田 崇作（広島大学）・阪上 辰也（広島大学）・森田 光宏（広島大学）・吉川りさ（広島大学）

オンライン学習プログラムにおける学習コンテンツ消化率を時系列に示した学習到達度曲線モデルを構築し、単位取得が困難となる学生を試験実施に先んじて検知する試みについての研究発表であった。この予測機による受験資格判定を実測判定と比較した結果、教育実践において利活用するに値する検査精度が得られた。

【報告：中西 のりこ（神戸学院大学）】

英語動画を活用した自己調整学習:発音矯正とリスニング・スピーキング指導

下山 幸成（東洋学園大学）

本発表は大学1年生29名に対して、有料動画サービスを主教材として利用して自己調整学習を促した必修科目講義の実践報告であった。授業前・授業内の課題を含む講義進行の説明とともに、その中での教材利用や発音指導に関する具体的で示唆に富んだ内容であった。質疑応答では機器の操作に関するトラブル対応や発音指導についての質問があった。

【報告：山本 勝巳（流通科学大学）】

英語スピーキング能力と自信を育てるアクティブラーニング:ビジュアル・シャドーイング（中山2011）を使って

松本 由美（玉川大学）

冒頭での小学校英語指導者養成の緊急性の指摘に続いて、発表者の勤務校における指導者養成システムでのスピーキング能力自修プログラムが紹介された。プログラムではジャーナル形式での記録の提出を求めて

おり、そこに見られるシャドーイングの効果について報告された。質疑応答ではシャドーイングの区別に関する質問があった。

【報告：山本 勝巳（流通科学大学）】

CLILとICTを使った音声学授業の効果の検証

西尾 由里（名城大学）

英語専攻の大学1年生30名を対象として、英語と日本語のバイリンガルで記述された音声学のテキストを利用した講義の実践報告であった。講義では基本的に英語を用い、CALL教室を利用して音声の配信・回収やアプリ利用とともにアクティブラーニングを促した。学生の満足度も高い一方で、いくつかの課題も明らかとなったとの報告であった。

【報告：山本 勝巳（流通科学大学）】

賛助会員プレゼンテーション

主体的な外国語学習を支援するウチダのソリューション

中村 達也（株式会社 内田洋行）

外国語学習を支援するActive Learning環境の提案として、普通教室においてスマホ等を活用して画像・動画の利用や情報呈示や情報交換を行うことが出来るオリジナル商品の紹介と、それらを用いた授業例等の紹介がされた。利用できるファイル形式や使用環境についての質問があった。

【報告：坂東 貴夫（金沢学院大学）】

「学び」によって得られる報酬を明確にした教科書の開発

株式会社 金星堂・森田 彰（早稲田大学）

Active Learningによる英語学習とその定着を目指して開発されたプレゼンテーション用の教科書について紹介がされた。Active Learning環境を提供するためには、達成すべき目標（学習成果）を明確にする必要が

あるとし、評価基準や教材の意図を学習者と教授者が共有できるよう工夫されている。評価方法や授業運営に関する質問があった。

【報告：坂東 貴夫（金沢学院大学）】

ICT化が進む教育現場の次なるテーマは「教室の無線化」

松田 茂（Actiontec Electronics, Inc. 日本オフィス）

タブレットを用いて英語授業を行う教室環境において、無線化の状況で電子黒板の利用等ができるディスプレイアダプタの紹介と、それを活用した指導例の紹介がされた。商品の独自性に関する質問、使用環境に関する質問、YouTubeの授業利用に関する質問等があった。

【報告：坂東 貴夫（金沢学院大学）】

研究発表・実践報告

Effects of Oral Repeating of Chunk Combinations on L2 Fluency and Accuracy

Yamaoka Koichi（Kansai University）

本研究発表は、チャンクの口頭繰り返し練習が、絵画描写タスクにおける流暢さと正確さに与える効果について検証した結果を報告している。実験の結果、統制群は流暢さのみ伸びたのに対し、処置群は流暢さと正確さ共に点が伸び、チャンクの口頭繰り返し練習により、流暢さと正確さのトレードオフが緩和されることが示唆された。

【報告：村尾 玲美（名古屋大学）】

The Effects of Intersession Intervals in Speaking Task Repetition

小林 真美（名古屋大学）

本研究発表は、タスクを1週間あけて繰り返す場合と間隔をあけずに繰り返した場合

とで、学習者の注意の配分がどのように異なるのかを検証した結果を報告している。絵画描写タスクによる発話を統語的複雑さ、正確さ、語彙の多様性の観点から分析した結果、タスクの繰り返し間隔の違いによる注意配分への影響は見られず、分散学習と集中学習のそれぞれの効果については明らかにならなかった。

【報告：村尾 玲美（名古屋大学）】

Automatic Detection of Difficult words in TED talks to Foster Second Language Listening

Mirzaei, Maryam Sadat (Kyoto University)
(発表はキャンセルされました)

【報告：村尾 玲美（名古屋大学）】

What is Ideal ELT Self for University Students Who are Interested in ELT?

Miyasako Nobuyoshi (University of Teacher Education Fukuoka)

英語教師を目指す大学生が英語使用に対して消極的な理由を探るために、教師と生徒の英語使用に焦点をあてた質問紙調査を行っている。その結果、ideal自己に特徴が見られたことが示された。質疑応答では、質問項目のought to自己とideal自己には重なりがあるのではないかと、という指摘があった。それに対しては、先行研究での枠組みに準じて質問項目を分類していると回答があり、また、今後は、これらの関係をより明確にするために、分析方法や設問項目の表現方法について工夫を行うことも課題としてあげられた。

【報告：石川 有香（名古屋工業大学）】

Web上のオープンコンテンツを活用したパーソナライズドラーニングシステムの開発と効果の検証

中島 愛（東京大学）・小野 雄一（筑波大学）

発表者は、これまでに、YouTubeやTED Talkなどオープンコンテンツを利用して学習教材を作成するYouTutorsという教材作成ツールを開発し、研究を行ってきた。今回は、1) 教員が学習行動をモニターする、2) ログから学習課題レベルを最適化する、という2つの機能を追加し、試用・評価を行っている。質疑応答においては、1) チャンク区切りはTED Talkでは元の区切りを使用していること、2) 語彙の難易度は「大学英語教育学会基本語リスト」を利用していること、3) YouTutorsは、YouTubeなど、スクリプトのある動画をデータとして使用することができることなどが報告された。

【報告：石川 有香（名古屋工業大学）】

難易度別CALL教材Listen to Me! による一斉授業と自律学習の併合:必修英語科目の壁を乗り越えて

椎名 紀久子（名古屋外国語大学）・浅野 昌子（名古屋外国語大学）・新居 明子（名古屋外国語大学）・森 明智（名古屋外国語大学）・ウェストビィ 三奈（名古屋外国語大学）

英語を専門とする大学生を対象とした、聴解に焦点を当てた必修科目における、オンライン教材活用の効果について実践報告が行われた。授業では、習熟度別に3段階のリスニング教材と、共通の語彙教材を用いている。事前と事後のテスト比較では、上位群では上昇幅が少ないものの、全群に上昇が見られたことが報告された。リスニング教材は、同一内容を異なる形式で繰り返す、「3ラウンドシステム」を採用しており、一部の教材のデモ提示も行われた。

【報告：石川 有香（名古屋工業大学）】

公募シンポジウム

人工知能によるスピーキングの自律学習支援と自動評価の可能性

金丸 敏幸（京都大学）・山下 仁司（大阪大学）・東 淳一（神戸学院大学）

本公募シンポジウムでは、人工知能を活用した新しい英語教育のあり方について、「大学入試改革の初等・中等教育への影響」と「人工知能を活用した発信技能の育成」という二つの大きな課題に絞って提案、議論が行われた。課題と課題の間には、提案者兼司会者の金丸（京都大学）から、人工知能研究の発展と現時点での成果についての説明があった。前半では、山下仁司先生（大阪大学）から、今後の大学入試英語を取り巻く状況の説明に続いて、とくに四技能試験の導入をにらんだ形で初等・中等教育における音声指導の負担増が懸念されるとの説明があった。それを受けて、望ましい学習サイクルのモデルが提案され、従来の予習サイクルに加えて、習ったことを家庭で繰り返し、定着を図る復習サイクルこそが発信型の教育には重要であるという指摘が行われた。さらに、この復習サイクルは現在のICT技術による教材など（Ex. FunGoやMusio）でも十分にカバーすることが可能であるとの見通しが語られた。後半では、東淳一先生（神戸学院大学）から、人工知能を搭載した英語ロボット（Musio）を学生に試用してもらい、英語発話の流暢さがどのように変化するかについて発表が行われた。実験では、協力者の学生がMusioと3日間、自由対話を行うというもので、その前後に収録した音読の音声进行分析している。分析の結果、自由対話後の音声は強弱がはっきりと観察され、これは、3日間の自由対話によって英語を話すことの心理的バリアが少なくなったためと考えられるという趣旨の説明がなされた。最後に全体を通しての議論が行われ、

とくに評価の観点から、人工知能によるスピーキング自動評価という点については、会話ログを分析的に解析するアプローチの他に、「自然な会話ができていく」、「話が通じる」といった主観的でホリスティックな評価の可能性についても議論され、今後の英語教育における人工知能の可能性を感じさせるシンポジウムとなった。

【報告：金丸 敏幸（京都大学）】

研究発表・実践報告

日本人英語学習者の聴解・読解に関する主観的な困難点:振り返りシートの記録を中心に

吉村 愛子（名古屋大学）

TOEICの聴解・読解時の学習困難点の内容分析をeポートフォリオ及び振り返りシートを用いて行った。

大学生7名を対象に行った調査では、困難点は1)方略に関する困難点、2)意識や感覚についての困難点（促進的不安も含む）、3)知識についての困難点、4)客観的困難点に分類され、その内容分析と、適切なフィードバックに関する考察がなされた。

【報告：今井 裕之（関西大学）】

英文難易度の違いがチャンク長と読解能力の関係に及ぼす影響

鈴木 政浩（西武文理大学）・湯舟 英一（東洋大学）・神田 明延（首都大学東京）・山口 高領（立教女学院短期大学）・田淵 龍二（ミント音声教育研究所）

英文読解力の評価をテーマとし、リーダビリティの異なる（3段階）英文を用い、学習者（大学2年生）の音読速度、チャンク長を分析した。他の難易度の英文と比較し、中程度の英文の場合、第一主成分に関してパターンが異なることが明らかになり、その結果に基づく考察がなされた。今後の課題として測定方法の改善などが挙げ

られた。

【報告：今井 裕之（関西大学）】

多読学習が英語読解力に与える影響について： スキル項目に基づく分析

林 幸代（福岡大学）・丸尾 加奈子（福岡大学）
川瀬 義清（西南学院大学）・長 加奈子（福岡大学）

多読教材“MReader”を用い年間11万語を目標とした多読教育実践に基づく研究で、19名（分析対象は14名）の英語専攻大学生を対象とした。一年間の指導の結果「長めの目的語を理解する能力」「関係代名詞、関係副詞を含む文を理解する能力」に伸長が確認され、池上(1981)の「もの」「こと」志向に言及し、英日の言語差の影響が議論された。

【報告：今井 裕之（関西大学）】

ビジネスで機能する英文Eメール・ライティングに求められる要因

戸田 博之（東京大学）

発表者は、15名のビジネス・プロフェッショナルにビジネスのEメールを評価させ、インタビューを通して、ビジネスのベテランが良いメールとして認めるeメールの要因を、談話分析におけるmoveの概念を基に考察した。英語基礎力に加え、ビジネスマインドがビジネスにおける良いメールとして重要な要素であると結論づけた。

【報告：橋本 健広（関東学院大学）】

L2ライティングにおける複雑性と流暢性の関係

西村 嘉人（名古屋大学）・川口 勇作（愛知学院大学）
姚 成陽（アクセンチュア株式会社）・阿部 大輔（名古屋大学）

発表者は、ライティングプロセスコーパスのデータを用い、L2ライティング研究における複雑性と流暢性を反映する指標間の関

係を、相関係数に基づくネットワーク図を描写して検討した。流暢性等の各指標群を図で確認した上で、流暢性を構成すると考えられていた一部の指標が複雑性を測定する指標群に属することを示した。

【報告：橋本 健広（関東学院大学）】

論理・表現の力を高めるプロセスライティングの実践でのライティング力に影響する要因

高橋 昌由（津山工業高等専門学校）

発表者は、高専生157名の英文エッセイに関して、ライティング力の伸長に影響を及ぼす要因を、Criterionの評価および質問紙調査を用いて検討した。英語への関心の大きさと動機づけツールがライティング力の伸長に影響を及ぼす要因であり、特に、問題解決に向けての態度と修正への意欲が必要であると結論づけた。

【報告：橋本 健広（関東学院大学）】

小学校英語教育にアクティブ・ラーニングを取り入れる活動-ICTを効果的に活用して

高橋 美由紀（愛知教育大学）

アクティブ・ラーニングの視点からの小学校外国語活動・英語教育の授業改善をテーマに、ICTを効果的に活用することがいかに生徒の主体的・協働的な学びの実現につながるか、海外（シンガポール、ロシア、中国、フィンランド、韓国、フィリピン）の小学校における授業例を取り上げ、紹介された。

【報告：今井 由美子（同志社女子大学）】

Mobile Content for Elementary School English Teachers

Jarrell, Douglas（名古屋女子大学）・Wang, Shudong（島根大学）

全国の小学校において、ALTがいる割合は約55～60%、全国にいる350136人の小学校教諭の中で英語免許所有者はわずか5%

弱、全体の70%弱は英語指導に「不安を感じる・自信がない」と感じている実態を紹介し、そのような「何をどうしたらよいか」不安を感じる先生のために身近な材料を活用したモバイルツールの紹介がなされた。

【報告：今井由美子（同志社女子大学）】

賛助会員プレゼンテーション

論文を読む、講義を聴く、留学する…を目指す！新コース「Academic English」のご紹介

リアリーイングリッシュ株式会社

Eラーニング教材ReallyenglishのAcademic English（総合アカデミック英語コース）について、シチュエーションやスキルに合わせた4技能を鍛えるためのラインナップ紹介が行われた。3つの導入形態が可能ということで、ASP（クラウド）、SCORMの2パターンに、新たにオンプレミス（クラウド）版が加わり、更に柔軟性が増したということであった。

【報告：松原緑（名古屋大学）】

スピーキング学習ツールとニュース教材を活用したモバイル学修提案

小杉麗奈（チエル株式会社）

MALL（Mobile Assisted Language Learning）に対応したアクティブ・ラーニング教材を目指した英語ニュース教材配信サービス「ABLish」の紹介が行われた。複数のニュース・ソースから週3回（2レベル）約1分間の短いトピックにまとめて音声と共に配信される教材で、英語の4技能に加え教養を身につける教材として利用できるということであった。

【報告：松原緑（名古屋大学）】

「Digital Student Book」を活用したクラス作り

佐藤真（株式会社 マクミラン ランゲージハウス）

通常の紙のテキストに加え、デジタル版のテキスト（Digital Student Book）の紹介が行われた。学生管理機能の他、120問の追加課題およびテスト問題を付属しており、教員は4年間、学生は1年間有効のライセンスが与えられる。会場からは紙版を残した上での追加という点が、使い勝手が良く有難いという声があった。

【報告：松原緑（名古屋大学）】

研究発表・実践報告

隠れマルコフモデルによるライティング過程の把握とその形成的評価への援用

草薙 邦広（広島大学）・川口 勇作（愛知学院大学）・阪上 辰也（広島大学）

発表者はWritingMaetriX（草薙・阿部・福田・川口，2015）というキー入力記録システムで収集したエッセイライティングのデータ（石井・石井・草薙・阿部・福田・川口，2014）をもとに、隠れマルコフモデルを利用し、エッセイライティングの過程を分析する方法を提案し、その可能性と限界について議論した。

【報告：梁志鋭（名古屋学院大学）】

日本人英語学習者のライティングにおける前置詞in, on, atの使用傾向

中西 淳（神戸大学）

発表者はInternational Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE)を利用し、前置詞 in, on, atを焦点に、日本人英語学習者の前置詞の使用実態を調べた。日本人英語学習者は前置詞の派生的な意味に関する使い方が苦手であることを報告し、前置詞についてより多くの種類の英文

を提示する必要性を議論した。

【報告：梁志鋭（名古屋学院大学）】

外国語学習におけるe-Learningの学習効果に関する一考察

李相穆（九州大学）

発表者は大学生464名を対象としたアンケート調査の結果をもとに、大学生のe-learning外国語学習に対する意識について、e-learningを利用する利点（例：「時間、場所、空間の制約がない」）と欠点（例：「学習意欲が沸きにくい」）について報告した。さらに今後必要とされる教材および教材を利用する側（学生）の意見に反映する教材開発の重要性が議論された。

【報告：梁志鋭（名古屋学院大学）】

Acoustic Features of English Oral Presentations for Creating Speech Model Samples

Hori Tomoko (National Institute of Technology, Tokyo College) ・ Yoshimoto Sadanobu (National Institute of Technology, Tokyo College) ・ Kojima Tetsuya (National Institute of Technology, Tokyo College) ・ Noguchi Judy (Kobe Gakuin University)

本発表は、プレゼンテーションの望ましい特徴を反映したスピーチサンプルを作成するために英語母語話者のプレゼンテーションの音響的特徴を調査したものであり、その分析結果が報告された。質疑では、使用した音声合成ソフトウェアの名称やスライドに示したグラフに関する質問があった。

【報告：天野修一（静岡大学）】

日本人英語学習者における英語イントネーションの発音指導の効果

赤塚麻里（名古屋外国語大学）・堀智子（東京工業高等専門学校）・遠山道子（文教大学）

本発表は、日本人大学生を対象に3種類の英語イントネーションの型（上昇調、下降

調、下降上昇調）に関する指導効果を検証したものであった。イントネーションのの違いが学習者の発音しやすさに影響しており、特に下降調より上昇調の方が発音しやすいことがわかった。質疑ではL1の方言の影響に関する質問などがあった。

【報告：天野修一（静岡大学）】

懇親会

レストラン曙（名古屋学院大学）

8月7日（月）：第3日

基調講演

外国語学習を促進するゲーム要素—子どもの視点からの考察

バトラー後藤裕子（ペンシルバニア大学）

次期学習指導要領の改訂では、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（アクティブラーニング）」について提起されました。一方、子ども達にとって、コンピュータゲームは日常生活の一部となっています。

今回の講演では、「コンピュータゲームの外国語学習への応用」について、バトラー先生が公立小学校6年生と一緒に行った「英語学習のためのコンピュータゲームデザインのプロジェクト」の事例研究を基にして、その可能性と留意点について発表していただきました。

はじめに、ゲームの定義を「ゴールとルールをもった遊びの一種」とした上で、コンピュータゲームの学習上の効果は、「言語学習の分野でもっとも大きい」というメタ分析の結果等を先行研究から紹介していただきました。そして、「子どもの視点から、学習と動機付けを促進するゲームの要素は何か」を考察するために、以下の様にそのプロセスを語られました。

これらの取り組みを通して「子ども達は、自らの学習内容も、学習ペースも自分で決めたいという自律性があつたことや、言語学習には繰り返しが重要であることも認識しており、繰り返しを楽しくするための仕組みや動機付け機能をゲーム案に組み入れていたこと」等が明確に示されたことを話され、最後に、様々な可能性を秘めたツールとしてのコンピュータゲームには潜在的な問題点もあるので、それをきちんと把握しておくべきであると述べられました。

本講演は、台風の影響で本大会最後のプログラムとなりました。帰路を急がれる中で、大勢の皆様到最后までご参加いただきましたことに感謝いたします。ありがとうございました。

【報告：高橋美由紀（愛知教育大学）】

研究発表・実践報告

多言語に対応したシャドーイング音声自動評価に関する実験的検討

峯松 信明（東京大学）・山内 豊（東京国際大学）・伊藤 佳世子（京都大学）・坪田 康（京都工芸繊維大学）

この発表の前半では、GOP（Goodness Of Pronunciation）スコアが、HMM（Hidden Markov Model）、DNN（Deep Neural Network）といった手法を用いて、どのように算出されるかについて説明がなされた。その後、DNNによるGOP計算の途中で得られる音素事後確率を用い、学習対象言語に非依存にモデル音声・学習者音声の比較を可能とする手法について検討された。

【報告：古泉隆（名古屋大学）】

ディープ・ラーニングに基づく新しいアルゴリズムによるシャドーイング自動評価の精度向上

山内 豊（東京国際大学）・峯松 信明（東京大学）・伊藤 佳世子（京都大学）・坪田 康（京都工芸繊維大学）・西川 恵（東海大学）

この発表では、大学生によるシャドーイング音声を3つの熟達度グループに分けて分析した結果、いずれのグループにおいてもHMM（Hidden Markov Model）よりもDNN（Deep Neural Network）を用いたほうが、母語話者教師による評定との相関が高いことが示された。その後、なぜ、HMMを用いることで精度が向上するのかについて考察がなされた。

【報告：古泉 隆（名古屋大学）】

相互行為分析からみたグループワークにおける「アクティブ」の発露について

福島 祥行（大阪市立大学大学院文学研究科）

本発表は、アクティブ・ラーニングについてフランス語初学者のクラス観察に基づき、発表者の構築主義的相互行為論の立場に立った研究発表である。学習者を単なる主体的・能動的な表現者であるとするより、協働学習においては相互行為の中で全く逆の客体的・受動的な側面をも生み出す補完的体現者ともなり得ることが報告された。

【報告：田上 優子（福岡女子大学）】

自律学習と学習スタイル:語彙学習をベースとするStrategizingモデル

若本 夏美（同志社女子大学）

Strategizingモデルに従い16名の大学生に実施した協働的語彙学習プロジェクトの報告。語彙に加え英語四技能を目標スキルに学習を8週間行った結果、特に情意・社会的方略の使用が増加し、学習スタイルの内向性・外向性に依らず協働学習を肯定的に捉え、教師からの明示的指導なしでBFS（最適学習方法）の発見ができた。

【報告：田上 優子（福岡女子大学）】

思考整理に焦点をあてた協働的ライティング活動の試み—プレライティング活動が学生の学習に及ぼす影響—

辻 香代（京都大学）

本発表は、思考整理に焦点をあてた、協働的なプレライティング活動の影響を観察したものであった。思考整理に関する自己評価および自由記述の結果から、本活動が学生の学習に好影響を及ぼしたことが示された。質疑では、使用言語に関する議論や、学生の熟達度、グループ編成の方法などに

ついての質問がなされた。

【報告：川口 勇作（愛知学院大学）】

Timed Reading活用による学習成果の「見える化」を目指した授業実践

西川 純恵（日本医科大学）

本発表では、時間を測りながら短めのパッセージを読む、Timed Readingの実践を行い、読んだ時間などを記録しグラフとして可視化するという実践の手順と成果が報告された。学習成果の可視化が、学生の主体性に肯定的な影響を与えたことなどが明らかとなった。質疑では、成績評価や読み返しの影響、正答率と読解速度の関係、教材選定の基準についての質問がなされた。

【報告：川口 勇作（愛知学院大学）】

賛助会員プレゼンテーション

ライティング指導ツール「Criterion」

山口 学（国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部)

米国Educational Testing Service (ETS)により開発されたライティング指導支援ツール「Criterion」の利用方法を、指導側および学生側の両面からデモ紹介した。付属の課題トピックや、課題提出法、採点基準、学生へのフィードバック内容が詳説された。また現在の国内における活用状況を紹介し、購入に関する情報や現場教育への導入法を説明した。

【報告：吉川りさ（広島大学）】

ALC NetAcademy シリーズ活用事例のご紹介

虎澤 将人（株式会社 アルク）

近年高まり続けるeラーニング教材の需要に応じて開発されたeラーニング教材「ALC NetAcademy NEXT」のコースのうち、とりわけ3つのスコアコースに分け

られたTOEIC(R) L&Rテスト対策の教材の使用法がデモ紹介された。各コースの構成と内容や、その学習方法、学修内容記録情報などが詳説された。

【報告：吉川りさ（広島大学）】

研究発表・実践報告

日本人学習者の英語イントネーションの定量分析

東 淳一（神戸学院大学）

本発表は、英語、日本語、日本語母語話者の話す英語のイントネーションのデータを分析し、その特徴を考察しようと試みたものであった。その結果、特に関西方言話者の話す英語では、ピッチの上下が激しいことが確認されたが、その幅は小さなものであることがわかった。質疑では、分析手法やその労力に関する質問があった。

【報告：天野 修一（静岡大学）】

モバイル利用のL2学習における効果と学習者オートノミーの育成

小張 敬之（青山学院大学）・佐藤 健（東京農工大学）

本発表は、モバイル学習を英語授業の一環として実施し、それを学習効果とオートノミーの両面から論じたものであった。その結果、学習効果とオートノミーの両面での向上が認められた。モバイル学習を授業と連動した授業外学習として実施したことで、その良い特徴が引き出され、学習者に良い影響を与えたと結論づけた。

【報告：天野 修一（静岡大学）】

初級学習者対象の英語ディベート「シンプル・ディベート」の導入に向けたスピーチ指導の提案

橋尾 晋平（同志社大学）

従来の英語ディベートを初級学習者向けに

簡略化した「シンプル・ディベート」が提案され、短期大学のスピーキングクラス（23名）を対象に、提案された方法論の検証が行われた。初級学習者でも効果的に立論・反論の英語スピーチが準備できるよう、テンプレート教材の有用性が議論され、開発された教材の紹介が行われた。

【報告：冬野美晴（九州大学）】

定型・非定型表現のL2心内における処理の比較—音読トレーニングを通して—

西村 浩子（関西学院大学）

英語定型表現（FSs）と否定型表現（NFSs）のL2メンタルレキシコンアクセスに焦点を当て、学習法として音読を用いた場合のFSsとNFSsの比較実験が行われた。実験では意味適合性判断課題が用いられ、正答率と解答反応時間が検証された。結果より、FSsの知識獲得には音と意味双方の反復指導・学習が必要である可能性が示唆された。

【報告：冬野美晴（九州大学）】

中学英語教授用資料における発音指導の扱い

河内山 真理（関西国際大学）・有本 純（関西国際大学）

（台風に伴う暴風警報発令により中止）

チャンツを用いた音読指導の効果:音響分析と人による評価の比較

川井 一枝（宮城大学）

（台風に伴う暴風警報発令により中止）

授業外協調学習支援ウェブ型アプリケーションを利用した英語反転授業

石川 保茂（京都外国語大学）・坪田 康（京都工芸繊維大学）・近藤 睦美（京都外国語大学）・津田 元紀（株式会社 内田洋行）・須藤 綾子（株式会社 内田洋行）・西山 康一（株式会社 インフィニテック）

（台風に伴う暴風警報発令により中止）

What Happens When Active Learning is Incorporated into EMI Class?

Sugimoto Sayaka (Waseda University)

(台風に伴う暴風警報発令により中止)

The Case Study and Effectiveness of MOOCS in EFL Required Course: A New Challenge for Freshmen at NUIS Focus on a Self-Directed Learning

Sato Yasuko (Niigata University of

Internationnal and Information Studies)

(台風に伴う暴風警報発令により中止)

ボイスレコーダーと辞書を用いた協働的会話振り返り活動の実践

山本 大貴 (兵庫教育大学) ・津田 ひろみ (明治大学)

(台風に伴う暴風警報発令により中止)

日本人英語学習者のライティングクラスにおけるアクティブ・ラーニングを通じたコレクティブ・フィードバック

星野 芳恵 (東京工芸大学)

(台風に伴う暴風警報発令により中止)

大学英語授業内オンライン英会話活動に関するガイドライン開発に向けて:学生の視点から

半田 純子 (明治大学サービス創新研究所) ・坂本 美枝 (明治大学サービス創新研究所)

(台風に伴う暴風警報発令により中止)

パネルディスカッション

ICTを活用したこれからの評価を考える

石井 雄隆 (早稲田大学)

(台風に伴う暴風警報発令により中止)

【報告：石井 雄隆 (静岡大学)】

ポスターセッション

英語苦手高専学生の英語力をいかに向上させるかーコミュニケーション・英語苦手学生の英語力向上への取り組みとその効果ー

水野 知津子 (明石高等専門学校)

Lingua Francaの観点からの航空英語教育

縄田 義直 (航空大学校)

ICT利用学習における手書き文字認識機能に関する研究

亀山 太一 (岐阜工業高等専門学校) ・矢崎 慎悟 (株式会社 リンクシーク)

学習記録による英語学習メディア環境への気づきの促進

高林 友美 (獨協大学)

Comparing the effectiveness of a multimedia learning application using authentic and non-authentic cultural material for Spanish as a Foreign Language

Blanco Cortes, Laura Maria (Kyushu University) ・Fuyuno Miharuru (Kyushu University)

映画と物語を用いた語彙学習

滝村 裕子 (東京大学)

英語のパラグラフライティングにおけるコミッククリエイター Pixton の効果的活用実践例

安田 尚子 (会津大学)

Up on the Cloud: Using Cloud Technology to Enhance Lesson Design

Oguri Seiko (Chubu University) ・Allen, D. Patrick (Chubu University) ・Kato Tetsuo (Chubu University)

ディスレクシアを持つ児童へのアルファベット指導について

板垣 静香 (関西学院大学)

自由作文が一人の学習者に与えた影響

小見山 和栄 (京都外国語大学)

閉会行事

司会：奥 聡一郎 (大会事務局長 関東学院大学)

挨拶：高橋 美由紀 (中部支部支部長 愛知教育大学)

2016年度本部事業・会計報告

2016年度本部事業報告

4月	賛助会員募集 理事・支部役員・各種委員名簿受付 学会HP、ML更新作業（以下随時） 学会賞（事前審査）・選考委員会開催（メール会議） 会計委員・会計事務所打ち合わせ（以下随時）	メルマガ135号発行
5月	学会賞選考委員会開催（メール会議） 機関誌52号会員宛発送	メルマガ136号発行
6月	学会賞選考委員会開催（メール会議） 本部会計（2015年度分）監査実施 機関誌電子版J-STAGE搭載・CiNIIより移行申請手続き 学会賞受賞候補者の承認を理事会に依頼（メール稟議）	メルマガ137号発行
7月	機関誌53号発行・会員宛発送 Newsletter No.97原稿募集開始 学会賞受賞者決定・広報・賞状作成	メルマガ138号発行
8月	LET全国研究大会（第56回全国研究大会）開催 （早稲田大学・8/7～9） 機関誌編集委員会・支部長連絡会・理事会開催 8/7 全国総会・学会賞授賞式 8/8 理事会議事録作成 機関誌54号投稿申込締切 8/31	メルマガ139号発行
9月	理事会議事録発行 Newsletter No.97広告募集	メルマガ140号発行
10月		LET blog 141号発行
11月	機関誌54号応募論文提出締切 11/30 Newsletter No.97広告募集	LET blog 142号発行
12月	機関誌編集委員会・応募論文査読者決定 Newsletter No.97発行	LET blog 143号発行
1月	機関誌査読依頼 会長・副会長会議(1/29・名古屋学院大学)	LET blog 144号発行
2月	機関誌54号応募論文再審査原稿提出	LET blog 145号発行
3月	学会賞候補者推薦依頼 機関誌54号応募論文結果通知 学会賞候補者推薦締切・候補者資料収集準備	LET blog 146号発行

外国語教育メディア学会(LET)本部 2016年度決算

2017年4月30日

* 会計事務所の指導により、年度当初の予算費目名と決算時の勘定科目名との相違がある。

【収入の部】

費目	予算	決算	備考
前年度繰越金	1,338,911	1,338,911	旧・繰越金+本部事業基金
賛助会費	2,000,000	1,950,000	39社*50,000
支部分担金	1,200,000	1,208,141	前年度各支部会費収入*0.15
広告掲載料	100,000	20,000	NEWSLETTER 97号
雑収入	1,000	202	銀行利息
合 計	4,639,911	4,517,254	

【支出の部】

費目	予算	決算	備考
印刷費	778,862	721,680	機関誌53号
	147,600		NEWSLETTER 97号
	60,000		その他
会議費	110,000	39,139	会長・副会長会議 会議室使用料など
通信費	50,000	242,151	郵送料・振込料(機関誌送送料195,662円を含む)
ネットワーク関係費	600,000	564,840	サーバ管理・業務委託料、IDシステム改良費用(ドメイン維持料含む)
旅費交通費	300,000	306,660	会長副会長会議などの公務出張の交通費補助
事務用品費	200,000	42,635	文具・用紙・トナーなど
支払手数料	0	7,878	銀行振込手数料
諸会費	0	50,000	教育系、言語系学会組織との連携費
全国研究大会開催費	1,200,000	1,211,452	全国大会業務委託費
	700,000		担当支部への支払い(理事会、各種委員会開催費等を含む)
雑給	50,000	0	事務局業務アルバイト料など
国際交流委員会費	100,000	0	IALLTなどとの連携に関わる費用
法人化準備積立金	300,000	300,000	定期預金に振替
繰越金	43,449	1,030,819	
合 計	4,639,911	4,517,254	

以上の通り報告します。

2017年 8 月 2 日

本部事務局長

尾関 修 治



上記内容につき相違ないことを確認しました。

2017年 8 月 3 日

会計監査

古 泉 隆



2017年 8 月 3 日

会計監査

村尾 瑛美



2016年度 本部事業計画

2017年4月1日

LET2017年度本部事業計画

4月	賛助会員募集 学会HP、ML更新作業（以下随時） 学会賞（事前審査）・選考委員会開催（メール会議）	LET blog 147号発行
5月	学会賞選考委員会開催（メール会議）	LET blog 148号発行
6月	学会賞選考委員会開催（メール会議） 機関誌電子版J-STAGE搭載・CiNIIより移行準備作業	LET blog 149号発行
7月	機関誌54号発行・会員宛発送 Newsletter No.98原稿募集開始 学会賞受賞候補者の承認を理事会に依頼（メール稟議） 学会賞受賞者決定・広報・賞状作成 本部会計（2016年度分）監査実施 機関誌電子版J-STAGE公開開始 あゆみコーポレーションと業務打ち合わせ	LET blog 150号発行
8月	LET全国研究大会（第57回全国研究大会）開催 （名古屋学院大学・8/5～7） 機関誌編集委員会・支部長連絡会・理事会開催 8/5 全国総会・学会賞授賞式 8/6 理事会議事録作成 機関誌55号投稿申込締切 8/31	LET blog 151号発行
9月	理事会議事録発行	LET blog 152号発行
10月		LET blog 153号発行
11月	機関誌55号応募論文提出締切 11/30 Newsletter No.98広告募集	LET blog 154号発行
12月	Newsletter No.98発行 機関誌編集委員会・応募論文査読者決定	LET blog 155号発行
1月	機関誌査読依頼 会長・副会長会議（名古屋）	LET blog 156号発行
2月	学会賞候補者推薦依頼 機関誌55号応募論文再審査原稿提出	LET blog 157号発行
3月	機関誌55号応募論文結果通知 学会賞候補者推薦締切・候補者資料収集準備	LET blog 158号発行

外国語教育メディア学会(LET)本部 2017年度予算

2017年4月30日

【収入の部】

費目	内 訳	金額
前年度繰越金		1,030,819
法人化準備積立金	2016年度より積立	300,000
賛助会費	40社*@50,000	2,000,000
一般会費	前年度各支部会費収入*0.15	1,200,000
広告代	NEWSLETTER 98号	40,000
	バナー広告2社	60,000
雑収入	銀行利息など	500
合 計		4,631,319

【支出の部】

費目	内 訳	金額
印刷費	機関誌54号	1,270,000
	NEWSLETTER 98号	147,600
	その他	30,000
会議費	会長・副会長会議 会議室使用料など	40,000
通信費	送料等(機関誌発送料130,000円を含む)	220,000
ネットワーク関係費	サーバ管理・業務委託料、IDシステム改良費用(ドメイン維持料含む)	570,000
旅費交通費	会長副会長会議などの公務出張の交通費補助	300,000
事務用品費	文具・用紙・トナーなど	40,000
支払手数料	銀行振込手数料	8,000
諸会費	教育系、言語系学会組織との連携費	50,000
雑給	事務局業務アルバイト料など	20,000
全国研究大会開催費	担当支部への支払い(理事会、各種委員会開催費等を含む)	700,000
	全国大会業務委託費(事前受付)	520,000
国際交流委員会費	IALLTなどとの連携に関わる費用	100,000
法人化準備積立金	理事会で承認された法人化事業推進費として(既積立金300,000円を含む)	600,000
予備費		15,719
合 計		4,631,319

外国語教育メディア学会(LET)本部

NEWSLETTER No. 98

発行日 2018年1月26日

発行所 外国語教育メディア学会 (LET)

会長 柳 善和